

趣 旨 説 明

総合地球環境学研究所
教授 阿部 健一

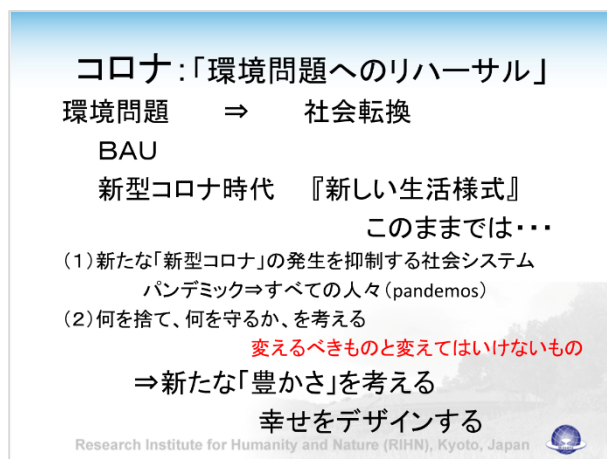
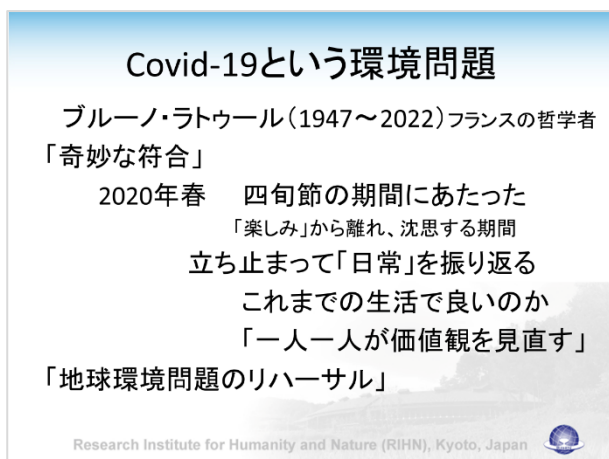
ただいまご紹介いただきました阿部でございます。環境シンポジウムの大きな狙いについては、先ほど岡橋理事長からご説明がありました。私のほうからは少し細かな話をしようと思っております。



3年半前ですか、2020年春に我々が新型コロナのパンデミック、感染症に直面したあの時のことをやはり思い出します。いま写真をご覧いただいていると思いますが、その時にこの最も下等な生物といわれているウイルスによって、かっこ付きで最も高等と言われている人間が作った高度な文明が脅かされるという状況になりました。

改めてあの時のことを、これから何度も思い出さなければいけないのではないかという感じがします。

ブルーノ・ラトゥールというフランスの哲学者がおられます。私ども研究所でも、昨年春に行おうとしていた国際シンポジウムへ是非来ていただきたいと連絡したのですが、体調が優れないため実現に至らず、その年の秋に亡くなられました。そのブルーノ・ラトゥールが2020年春に、コロナに直面しているヨーロッパから、これは奇妙な符号だとおっしゃいました。どういうことかということ、カトリックの四旬節にこの時期があたっていたということです。四旬節とは、復活祭40日前の期間のことを指すようで、この期間はいろいろな楽しみを、例えばおいしい食事をするようなことを避けて、家族と一緒に静かに暮らす時期とされているようです。ラトゥールにとっては、コロナによって家に閉じこもり、家族とだけ話をする。それはまさに四旬節だったと、この点が奇妙な符号だということだと思います。実は他にもいろいろな宗教で、このような期間があります。立ち止まり、いままでのことやこれからのことをじっくり考えるような期間が必要だということです。四旬節との奇妙な符号とは、新型コロナが我々に要求したのはまさに立ち止まって考えてみなさいということではないか、これがラトゥールの言っていることです。これまでの生活でいいのか、一人一人の価値観を見直す、そして社会を見直す時期なのではないかと。その上で、彼は続けて、新型コロナは地球環境問題のリハーサルだとおっしゃっています。練習台だということなのです。



ということかという、地球環境問題が我々に要求しているのは、新しい社会を作っていかなければいけない、今までとは違う社会、社会転換をしなければならないということです。我々環境問題を扱う者の間で、BAU という言葉をよく使います。Business as usual の頭文字です。このままで続けていけば大変なことになる。地球温暖化や気候変動だけではなく、さまざまな地球環境問題が示していることであり、我々の社会に要求していることです。このままでは駄目で新しい社会へ変えていかなければいけない。新型コロナの時も、そのようなことがいわれました。新しい生活様式、このままでは駄目で、別の生活様式を考えなければいけない。勿論その生活様式を支えている価値観も見直さなければいけないということです。ここではあえて新型コロナのことだけを抜き出していますが、新たな新型コロナの発生を抑制するような社会システムをまず考えなければなりません。パンデミックの語源を辿ってみると、全ての人々ということで、明らかにSDGsのことなども思い浮かびます。誰一人取り残されない。ある意味、コロナというのは平等でした。金持ちも貧乏人も、かかる時にはかかる、亡くなる時は亡くなるということです。世界中の誰にとっても起こりうることなのです。

もう一つ、地球環境問題のリハーサルだというのは、何を捨てて何を残すか、守るかを考えるということです。いままでの生活の中で大切なものだからずっと守っていかなければならないものもあります。同時に、これは不要だ、なぜこのようなことをやっていたのかという必要ないものもあります。新しい生活様式として、それらをきちんと分別する、そして守るものは守り、変えるべきものは変えていくことを行っていかなければならない。これが、今日のこのシンポジウムの趣旨であります。

コロナは一応収まりました。収まったということになっています。しかし、このコロナを経て我々が考えなければいけないのは、何を残して何を变えるのかということです。

コロナ「後」の社会

「コロナ」: 新たな感染症は必ず発生する

スペイン風邪 (H1N1 新型インフルエンザウイルス)
1918~1920 死者5000万人以上

SARS (重症急性呼吸器症候群SARSコロナウイルス)
2003~2004

ほかにも

Research Institute for Humanity and Nature (RIHN), Kyoto, Japan


コロナ後の社会について改めて歴史を振り返ってみると、スペイン風邪というものがちょうど100年前に起こりました。亡くなられた方が5000万人と言われています。これもインフルエンザです。SARS や MERS というものもありました。SARS は2003年に起こったもので、こういった感染症は必ずまた新型コロナの後に出てくるのは間違いありません。何年後になるか分かりませんが、必ず新たな感染症、パンデミックは起こり得ます。

コロナ「後」の社会

「コロナ」: 新たな感染症は必ず発生する

鳥インフルエンザ
1878年イタリア 1955年

コイヘルペス
1988年 イスラエル
2003年 日本
PCR検査・ワクチン開発



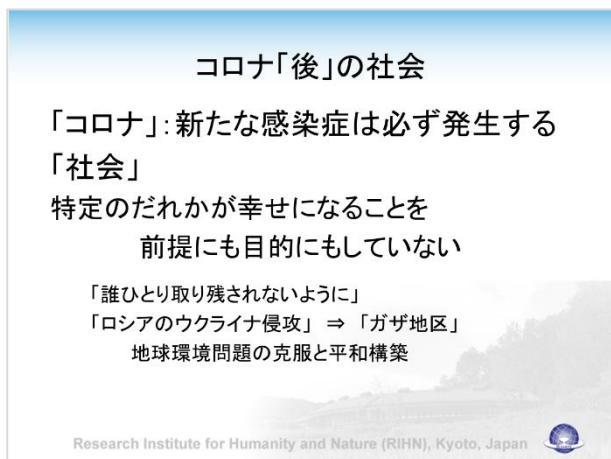
Credit: THINKSTOCK

「人間による環境変化が感染症の発生と拡大を引き起こす」ことが実証される (地球研プロジェクト)

人間から少し離れてみましょう。鳥インフルエンザは実は古く、1878年にイタリアで報告例があります。1955年にインフルエンザウイルスが原因だということになります。そしてコイヘルペスもウイルスです。1988年にイスラエルで発見され、2003年に日本に入ってきました。鯉がこの病気にかかると、致死率100パーセントで、かかったら鯉は必ず死んでしまうという病気です。

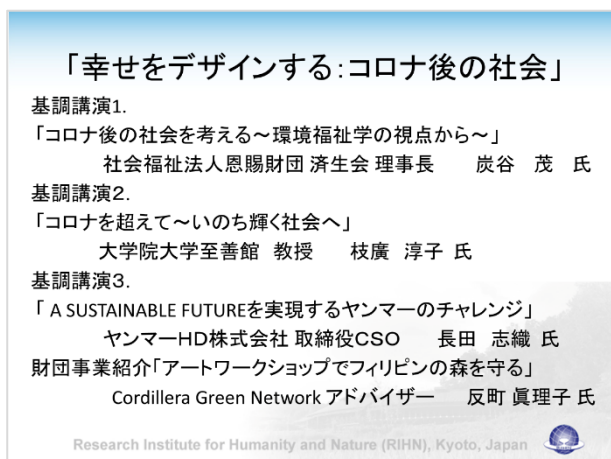
この時に実はPCR検査、ワクチン開発を行って、コイヘルペスを抑制することができました。今回の新型コロナもやはりPCR検査、そしてワクチンの開発で収まりました。鯉で20年前に起こったことを、20年後に人間が新型コロナというかたちで同じことをやりました。われわれの研究所で、実はこのコイヘルペスのプロジェクトを立ち上げました。その結果どういことが実証されたかという、人間による環境変化が、コイヘルペスという感染症の発生と拡大を引き起こすということです。鯉にとっての環境、水質などの変化が、実はコイヘルペスの拡大に寄与していました。その水質変化は、我々人間が変えていったものです。きわめて示唆的です。

繰り返します。これは鯉で起こったことですが、いま同じようなことが、もしかすると人間にも起きている。これはおそらく炭谷先生のほうが詳しいので、少しまた補足をしていただければと思います。



社会というのは、実は特定の誰かが幸せになることを目的としていませんし、前提ともしていません。これは大事なことです。みんなが、誰もがということです。SDGs とは、誰一人取り残されないようにと掲げています。取り残された人がいると、我々誰一人として幸せになれない、そこまで考えるべきことなのです。それが社会というものなのです。

我々はいま今日のシンポジウムのチラシを手にしてありますが、このチラシを1か月前に作った時には、まだロシアのウクライナ侵攻だけでしたが、先ほど理事長も触れられましたが、ガザ地区において起こっていること。実は地球環境問題を解決するということは、平和構築と根底のところでも重なっています。一人一人が幸せになる、そして誰か一人でも不幸せな人がいると誰もが幸せになれない、という考え方がとても大切だということをお伝えされるということです。



今日のシンポジウムでは、そのようなことまで考えていきたいと思っています。なかなか難しい課題ですが、幸いにして本日は3人の基調報告の方、そして実際にフィリピンで活動されている我々環境事業の担い手である方、合計4名の方々からお話を伺いお知恵を拝借しながら、パネルディスカッションというかた

ちで、最後にどうすべきか、どうやって幸せな社会を実現するのかを考えたいと思います。

繰り返しますけれども、守らなければいけないものは何なのか、変えなければいけないものは何なのかを考えながら、今日1日、このシンポジウムを皆さんと一緒に過ごすことができればと思っています。

(終了)